

## 平成31年 年頭記者会見 会見録

日時 平成31年1月9日（水）午後2時～2時35分

場所 市役所2階第1特別会議室

（市長）

明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願いいたします。

さて、正月恒例の箱根駅伝では、青山学院大学が、5連覇とはなりませんでしたが、奮闘を見せ、復路優勝を成し遂げてくれました。また、昨年末には、ホームタウンチームの三菱重工相模原ダイナボアーズが、入れ替え戦に見事勝利し、実に12年ぶりのトップリーグ昇格を決めてくれました。チーム名の「ダイナボアーズ」は、ダイナミックに疾走するイノシシという意味が込められているのですが、今年は、そのイノシシ年でもあり、日本でワールドカップも開催される年でもありますから、ダイナボアーズらしく、トップリーグで旋風を巻き起こしていただきたいと思います。

それでは、平成31年の年頭にあたり、お話をさせていただきます。ご承知のとおり、我が国は、本格的な少子高齢化・人口減少社会の到来で、各自治体とも大変厳しい状況になると認識しております。そうした状況下においても、誰もが安全で安心して心豊かに暮らせるよう、子育て支援、福祉、医療、教育の充実、防災・減災対策、雇用の創出等、各分野の施策を総合的に進めてまいります。さらに、本市の大きなポテンシャルを最大限に生かし都市力の向上を図るなど、持続的に発展し、笑顔と希望があふれるまちを目指して全力で取り組んでまいります。また、本年は、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会を翌年に控えた重要な年となります。大会の成功に向け、機運の醸成やレガシーの創出等の取り組みを進めてまいります。

なお、新年度の当初予算案につきましては、現在、編成作業を行っているところでございますが、4月に、統一地方選挙が実施されますことから、経常的経費や、継続的な事業に係る経費などを中心に計上する「骨格予算」として編成を進めております。市民の皆様の生活に密接に関わる事業の予算は、しっかりと確保し、編成してまいります。

次に、養護が必要な お子さんへの支援についてです。児童養護施設や里親のもとで生活しているおさんは原則として18歳で養育期間が終了し、延長しても20歳で、施設や里親のもとを離

れなければならず、その後の支援や、経済的負担が課題となっております。また、国の調査によると、大学等への進学率は、一般家庭の74%に比べ、27%となっており、1/3程度にとどまっています。これは、学費の負担が大きいことが背景にあると思われます。こうしたお子さんの、自立した生活や、就労・就学を支援するため、本市では、平成31年度から「こども・若者未来基金」や、国の制度を活用し、「社会的養護自立支援事業」をスタートします。具体的には、生活や就労に関する相談の実施、社会福祉士等による自立に向けた支援計画の作成など、相談体制の充実を図るほか、状況に応じて、生活費などの支給を行います。また、国の制度にはない、本市独自の取り組みとして、対象となる高校生への学習塾代や、大学等に進学した際の、奨学金の給付など、積極的な支援を行ってまいります。今後とも、生まれ育った環境によって将来が左右されることのないよう、子どもに寄り添った施策を展開してまいります。次に、2月9日（土）に市立博物館で開催する「宇宙フェスタさがみはら」についてでございます。このイベントは、宇宙科学への関心を高めることを目的に実施するもので、今年は「相模原から水星へ」をテーマに、JAXAの研究者による講演会や、惑星を題材にした漫画家の石川雅之さんを交えた座談会等、水星探査の意義などを語っていただきます。そのほか、水星をテーマとしたプラネタリウムの上映、桜美林大学の学生による生演奏と宇宙映像とのコラボレーション、日中の天体観測など、様々なアプローチで宇宙の魅力を感じいただけるイベントですので、多くの方にご来場いただければと思います。

私からは以上でございます。

（記者）

まず、「宇宙フェスタさがみはら」についてお伺いします。フェスタの開催を通してどのような成果を期待されますか。

（市長）

「宇宙フェスタさがみはら」は今回で3回目を迎えます。本市にはJAXA宇宙科学研究所がありますし、今注目されております「はやぶさ2」は、リュウグウへのタッチダウンを2月18日頃に予定していると伺っており、日本のみならず、世界中の方々から関心を持っていただいております。こうしたことから本市では、このイベントを通じて、宇宙を身近に感じていただき、また、相

模原のシティセールスに繋げていきたいと考えております。そして子どもたちが将来、宇宙飛行士や宇宙関係の研究者など、宇宙に関連する仕事に従事し、社会的に活躍していただきたい、という願いも込めまして、このようなイベントを開催させていただいております。

(記者)

昨年末の記者会見で、一年を振り返る漢字を一文字で表していただきましたが、今年の抱負の漢字を一文字で表現されると何になりますか。

(市長)

安全の「安」です。安全、安心というのは、自治体、行政運営の一番の原点です。去年は大きな災害があり、本市内でも台風24号により、土砂災害で国道等が通行止めになったということもありました。こうしたことから、安全対策を重点的に行う必要があり、何よりも、人口減少、少子高齢化時代であったとしても、すべての人が、安心して暮らせる地域社会を実現したい、また、そういう年であってほしいという思いから、安全の「安」を今年目標の漢字にさせていただきました。

(記者)

今回の「安」の字が書かれた色紙は市長ご自身で書いたのですか。

(市長)

もちろん、そうです。

(記者)

習字は習っていたのですか。

(市長)

習っていません。小学校の時の習字の授業で習ったくらいで、市長になって初めて、相模の大風の題字などの揮毫を頼まれ、書くようになりました。

(記者)

社会的養護自立支援事業についてですが、相模原市内で対象となる方は何人くらいいますか。

(市長)

社会的養護自立支援事業には様々な支援項目がございます。例えば生活相談、就労相談については、約100名程度、居住費、生活費の支給については数名、継続的支援計画の作成については10人程度を想定しております。また、市単独事業の学習塾代等の支給や、大学等への進学奨学金は数名程度を想定しております。現在、施設等への入所者は昨年12月1日現在で261名、そのうち30年度末で退所する人数は17名ですので、先ほど申し上げた想定人数の中で対応できると考えております。

(記者)

この事業の予算規模はどの程度を想定していますか。

(こども・若者未来局)

現在予算編成中でございますが、全体で約三千数百万程度と想定しております。

(記者)

これは、3月の市議会定例会議で、来年度の当初予算案に計上するということですか。

(こども・若者未来局長)

先ほど市長から説明申し上げましたとおり、市民生活に密着するものは来年度の当初予算に計上させていただきたいと考えております。

(記者)

他の市町村の実施状況についてお伺いします。

(こども・若者未来局長)

県内で申し上げますと、川崎市が昨年度実施していると伺っております。

(記者)

それはどの支援項目についてでしょうか。

(こども・若者未来局長)

川崎市は、今回相模原市で実施する支援項目はすでに全部実施しています。神奈川県や横浜市は、国庫補助事業の対象となっている生活相談、就労相談などの一部を以前から実施していますが、学習塾代や、大学進学奨学金の支給については実施されていないと承知しております。

(記者)

そもそも国庫補助事業ということは、国の制度の中にあるものを、市が応募して勝ち取ったということですか。

(こども・若者未来局長)

勝ち取ったと言いますか、継続支援計画の作成や、生活相談、就労相談、居住・生活費の支給などを自治体を実施する場合について、国が補助金を出すということが平成29年度に制度化されております。

(記者)

平成29年度からの国の事業ということですか。

(こども・若者未来局長)

厚生労働省の国庫補助メニューです。

(記者)

国の制度が下敷きにあった上で、川崎市などを参考にし、市単独事業である学習塾代や、大学進学奨学金の支給を付加したということでしょうか。

(こども・若者未来局長)

川崎市を参考としたということではありません。昨年、市長の強い思いから、ひとり親家庭への支援などを重点的に行ってまいりましたが、今回も自分の力ではどうすることもできない、社会的養護の子どもたちを自立させていく必要があるということで、新たに構築したところでございます。

(記者)

ひとり親支援の延長線として、社会的養護を必要とする子どもへの支援ということですか。

(市長)

ひとり親といいますか、児童福祉施設等で生活しているお子さん、人数は多くはないのですが、そういう子が一番困って、悩んでいると思います。私も児童養護施設である「中心こどもの家」を視察した際に、そんな子どもの気持ちが伝わってきて、是非、支援をしたいと思います。ひとり親世帯を含めまして生活困窮者の部分については、昨年、給付型奨学金制度を創設し、約300人のお子さんを支援することができましたが、ただ、まだ他にも支援を必要とするお子さんがいるわ

けですから、そのお子さんも支援していきたいと思っております。

(記者)

清川村の大矢村長が昨日お亡くなりになりましたが。

(市長)

亡くなられたのですか。

(記者)

亡くなったという連絡が先ほど入りまして、相模原市は清川村と隣の市であり、繋がりもあったかと思いますが。

(市長)

大矢村長のいる清川村は、神奈川県唯一の村で、神奈川県内でも特色ある自治体運営をされていたと認識しております。観光や定住政策に一生懸命取り組まれており、その成果もでてきていると思っております。これからは、様々な周辺地域の自治体と連携する時代になってくる中で、清川村とも様々な連携事業もさせてもらっています。以前に宮ヶ瀬湖周辺を自転車のメッカにしたいということで、自転車ロードレースなどを清川村と相模原市で連携してやりませんか、とお声がけさせていただいたことがあります。また、行政境にある「鳥居原ふれあいの館」の物産直売所もご協力いただくなど、経済連携を図らせてもらいました。また、相模川サミットの中でも、お互いに周辺環境をきれいにしようと、相模川クリーン大作戦を一緒に行うなど、様々な協議、対策、連携を進めてきたところございまして、昨日お亡くなりになったということで、非常に私としては残念で、寂しい気持ちでいっぱいでございます。これからも、自治体間としての連携は、大矢村長の意思もしっかり踏まえながら、我々もお付き合いをさせていただきたいと思っております。

(記者)

大矢村長のお人柄というのは。

(市長)

穏やかで、大変良い方です。地域を愛していることが伝わってきました。人口減少問題や定住促

進を踏まえて、自転車競技大会の誘致を連携して行うことを提案したこともありましたが、大矢村長からは、地域振興としては実施したいが、例えば交通事故対策などがまだまだ不十分だということで、今のタイミングでは難しい、というお話があったことがありました。そういったことを含めまして、地域のことをよくご理解されたり、また、心配をされたりということで、清川村を愛していた気持ちをいっぱい持っていた村長であったと思います。

(記者)

大矢村長が清川村を愛されていたという話がありましたが、市長と一緒に活動された中で印象に残るお姿というのはありますか。

(市長)

年に1回、開催される「県央相模川サミット」という相模川流域の市町村の連携会議があります。その中では、これからの地球温暖化対策や自然環境の保護、防災対策などで、清川村を含めた県央の市町村と県で連携していこうと協議しておりますが、大矢村長は、自分たちの清川村を大事にしたい、という強い思いがあり、清川村が持っている資源、いわゆる自然を大切にしながら、地域振興策をしっかりとやっていきたい、とおっしゃっていました。一例をいいますと、施設を改装して道の駅を作り、清川村の特産品などの販売や観光情報を発信したり、宮ヶ瀬湖を挟んで隣り合わせである本市とも観光資源などで連携したりしてきました。また、清川村は宮ヶ瀬湖のクリスマスツリーのイルミネーションが有名ですが、これは大矢村長の、清川村を愛して、清川村をみんなに知っていただきたい強い思いがこもった施策が、だんだん広域的になり、充実をしてきたということだと思っております。また、それぞれのコミュニティーエフエムで、お互いの情報を放送したりしております。このように、様々な場面で住民同士の交流がありましたし、これからも交流を深くしていきたいと思っております。

以 上